立命館大学
日本文学会 ニュース No.45
「論究日本文学」第74号 付録 2001.5

日文研究室だより

古い文庫本のこと

二〇〇〇年度
会長 上田 博

この3月の中頃から、カバーのすり切れた文庫本を日がな一日読んでいる。200ページ足らずのものであるから、本来の文庫本である。4月になっても2度目として同じところを読んでいる。奥付を見ると30年前に、ぼくが30歳の時に年をくった大学院生であった時に新しい文庫本として読んでいるから3回目である。3月に1年余をかけて書いたものを出版社へ手渡して、そのあと頭の中がからっぽになった時に、読み古した本をあれこれ手に取っている、そのちょっとした隙間にこの古い文庫本が目に止ったのである。第一、「解説」が気に入った。

「この小説はていねいに時間をかけてゆっくりと読まれることを要求している。」

この最初の一行に惚れ込んだのである。

「学問や特別知識は何の価値もない。芸術家として成功しているとは、旨く人形を列べて、踊らせているようなところを云うのではあるまいか。」

それを高尚ぶって、ライフだとかアートとか云うのではあるまいか、小説の人物の一人がこんなことを心の内でしゃべるのである。30年前に読んだときには漱石の「三四郎」に比べて何と見劣のする小説かと投げつけていた、その同じ小説である。味わっても味わっても次々に読みたい欲望を起すのである。今4回目を迎えているのであるが、カバーの折り返しのところでとうとうちぎれてしまった。新しいとか古いとか簡単に決めてしまうのがはばかられるではないか。3月4月は例年、うつ状態になって家に籠っているのであるが、この古い文庫本のお蔭で、桜も葉桜へといつしか移って行ったのである。